

書評：本田仁視 「視覚の謎 症例が明かす<見るしくみ>」

神奈川リハビリテーション病院 眼科 仲泊 聡

ずばり、私を書いてみたいと常日頃より思っていた内容を本書は網羅しています。脳損傷をきたした患者さんの中には、なんとも不思議な視覚体験を訴える方が結構います。今の医療体制は、脳損傷患者が変な見え方をしていても、よほど強く訴えなければ眼科医のもとへ来ないようなしくみになっているのではないのでしょうか。まして、視覚研究者のもとへ紹介される症例など、ほとんどないといつてよいくらいでしょう。だからといって、ほとんどの症例は、眼科医や視覚研究者が治せるわけではありません。それに、自分の変な見え方に最初は戸惑っていても、しだいに諦め、慣れてしまう方も多いのが実情でしょう。また、時間がそれを治してくれる場合も少なくありません。だから、そういう患者さんは、私たちの前には、現われにくいのです。

私は、リハビリ病院という脳損傷患者の受診率がやたらと高い特殊な環境に来て3年半で、部分的障害を含めればすでに本書の全章にわたる事例を体験してきました。当初は、わたし自身はかなり戸惑い、そして先輩たちに教を請いました。しかし、それに答えてくれる先輩は、眼科医ではなく、神経内科や臨床心理の先生でした。彼らは、さまざまな不思議な現象をこれまでにみてきており、私は多くを学びました。しかし、視覚そのものについては、皆素人であり、なぜそういう風に見えるのかについては、答えができませんでした。結局、自分で調べるしか、方法はありませんでした。

本書では、心理学者であり、視覚研究者である著者が、自分の体験も交えて大変に分かりやすくこの分野をまとめておられます。事例を中心に話題が展開していますので、とても面白く読み進むことができました。なぜそういう風に見えるのかについては、残念なが

ら「・・・に関する研究は、まだ始まったばかりである。」というような各章ごとの捨て台詞(?)が示すように、明確な答えは本書をもってしても得ることはできませんでした。しかし、今この分野では、何がわかっていて何が分かっていないのかについては、大変にわかりやすくなっていると思います。だから「視覚の謎」なわけです。

本書を読めば、この分野の最先端まですべて分かるというものではありませんが、少なくともわたしのここ3年半のうちの最初の1年分以上の知識を、たった一晩で習得できることは請け合いです。視覚を研究している方には、ぜひ一度お読みいただきたい一品と、ここにご推薦いたします。最後に、本書の中には、全体の他の部分とは、多少趣の異なった先天色覚異常の見え方についての詳しい記載があります。色覚研究者の方には、大変参考になるかと追加ご報告いたします。

データ

本田仁視「視覚の謎 症例が明かす<見るしくみ>」
引用文献 160 A6版 250頁 ハードカバー
福村出版 平成10年9月1日発行
定価 2600円+税

目次

- 1章 見えていないのに見えている-盲視(ブラインドサイト)
- 2章 色のない世界-色覚障害
- 3章 飛び跳ねる世界-前庭系障害
- 4章 物の位置がわからない-視覚性定位障害
- 5章 二次元の視覚空間-立体視の障害
- 6章 動いている物だけが見えない-運動知覚の障害
- 7章 意味を失った世界-視覚失認
- 8章 顔のない世界-相貌失認
- 9章 消えない視覚像-反復視
- 10章 二分の世界-半側空間無視
- 11章 はじめて見る世界-開眼手術
- 終章 症例研究と認知機能